

海側の観測孔・・・全ベータ 300 万 Bq/L

タンクから 100 トン漏えい・・・2 億 3 千万 Bq/L (2 月 19 日)

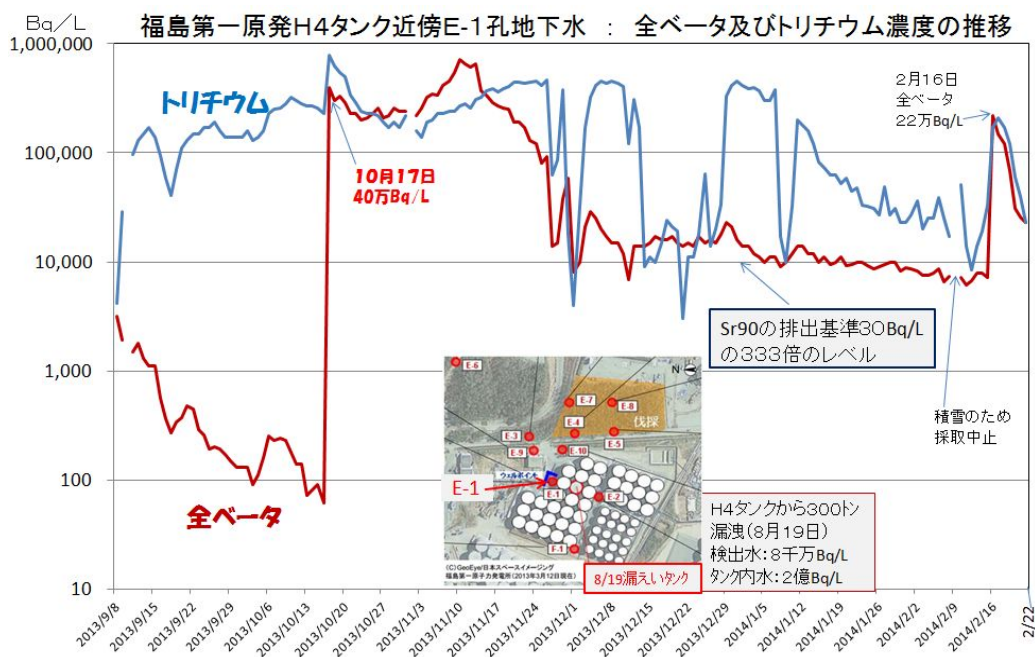
## 早急に実態を把握し公表せよ、海への放出に反対する 原発の再稼働審査を中止し、汚染水対策を優先せよ

### 1. タンクからの新たな漏えい

昨年 8 月 19 日に福島第一原発の H4 エリアの N o. 5 タンクから 300 トンの汚染水が漏えいした。その中のストロンチウム 90 は、広島原爆がまき散らした量の約半分、3.11 事故時の放出量の約 5 分の 1 に相当していた。このタンクは水抜きしたが、漏えい原因となったフランジ型構造をもつタンクは 310 基あり、同様の漏えいが起こり得る（リーフレット参照：[http://www.jca.apc.org/mihama/fukushima/leaf\\_201309.pdf](http://www.jca.apc.org/mihama/fukushima/leaf_201309.pdf)）。

そのため、漏えいした N o. 5 タンクの近くに観測用井戸 E-1 を設け（地下 7 m）9 月初めから観測を始めたところ、10 月上旬にかけては全ベータの濃度は低下気味で 100 Bq/L を切るまでに下がっていた。ところが 10 月 17 日に突然 40 万に跳ね上がった（下記グラフ）。その後 11 月半ばに低下し始めたが、12 月から横ばいで今年になっても 1 万のレベルを維持していたが、2 月 16 日に突然 22 万に跳ね上がった。

井戸内の汚染水は、地下水や雨水によって絶えず薄められるはずなので、濃度は低下するはずである。10 月 17 日の突然の上昇は、どこかのタンクで漏えいがあったからとしか考えられない。その後も横ばいになっているのは新たな高濃度の汚染水が絶えず供給されているためであり、2 月 16 日にまたタンクの大規模な漏れが起こったに違いない。



他方、この重大な問題が規制委員会のワーキンググループでは議題にさえ上っていない。この会合は 10 月 17 日以降では、10 月 24 日にもたれ、11 月 12 日は延期になり、その後 1 月 24 日に開催されただけであるが、これらタンクからの新たな漏えいは、議題にさえ上っていない。原発の再稼働審査で大忙しなためだろうか。

さらに、2 月 19 日には H4 の南側(グラフ内図で右側)にある H6 エリアのタンクから、2 億 3 千万 Bq/L という超高濃度の汚染水が 100 トンも漏れた。タンクが満杯という警報がなったのに放置。原因は弁操作の誤りと報道されているが真相は不明。基本的な管理ができていない。

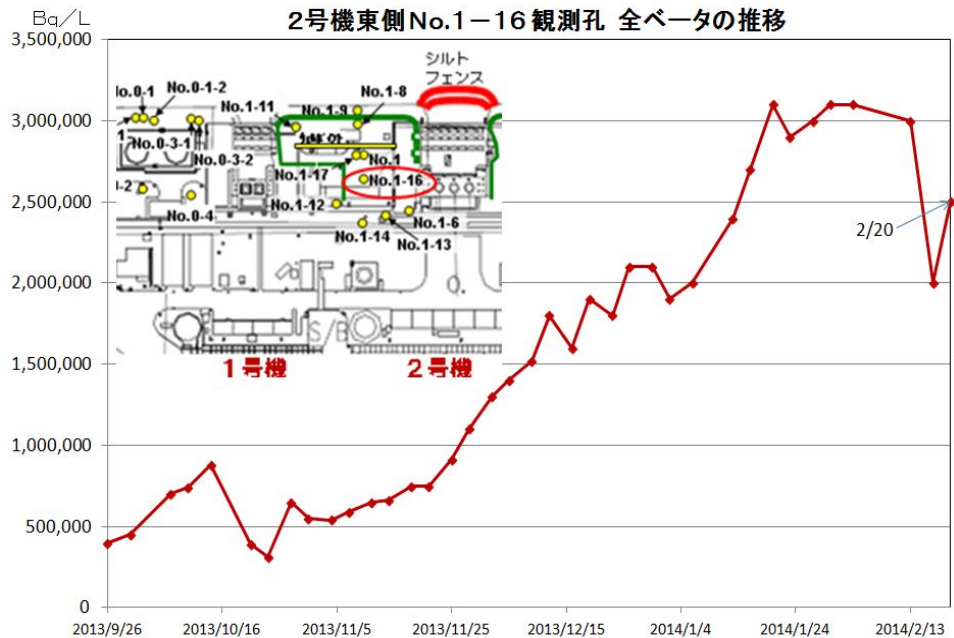
## 2. 海側での漏えい

もう一つ顕著なのは、原子炉より海側（東側）での観測孔No. 1-16が示す事実である。この観測孔は昨年9月26日から測定値を公表しているが、全ベータの測定値は11月20日頃から急上昇し、今年に入ってまた一段と急上昇して300万Bq/Lのレベルに達している（右図）。この観測孔の位置は2号機の海側であるが1号機にも近い位置にある。2号機が1号機から漏えいした汚染水が流れ込んでいると考えられる。

また、No. 1-16の更に海側の位置にある井戸から昨年7月5日に汲み上げ

た水で、ストロンチウム90が実は500万だったと、東電は2月6日に公表した。この値を東電は「値が不自然だ」として伏せており、全ベータ濃度で90万だと公表していた。ストロンチウム90は全ベータの約半分だと考えられるので、全ベータは本当は1000万あったということになる。これだけ高い濃度の汚染水が海のすぐ傍にあるということは、それだけ海が汚染されていたということにつながる。

また、2月13日付東京新聞によると、2号機の海側敷地の井戸から7万6千という放出限度の500倍以上の高濃度セシウムが検出されている。建屋からトレンチに入った汚染水が漏れたのではないかと推測されている。



## 3. まず実態を把握せよ、海への放出反対、再稼働審査より汚染水対策を優先せよ

I A E A の調査団は昨年12月4日に、「基準値を下回るものは、海への放出も含めた検討をすべきだ」と助言した。「一定の管理下での放水は世界中で行われている」というが、例えば、2002年度中に日本の全原発から放出された液体中放射能(トリチウムを除く)は23万Bqである。No. 1-16中の水1リットルだけで、その13倍もの全ベータを含んでいるのだ。

それよりも今問題なのは、上記2つのグラフで示したように、タンクや建屋内から高濃度の汚染水が絶えず地下水などに流れ続けているということだ。この汚染水はいったいどこへ行っているのだろうか。地下水を通じてどこからか海に流れ出ているに違いない。

東電の廃炉・汚染水対策推進体制は4月以降に分社化する予定である。しかし、現在の汚染水放置の実態を見ると、分社化は東電の責任逃れのためではないかと強く懸念される。

早急に、汚染水の実態を把握し公表すべきだ。溶接タンクを増設してフランジ型から移送し、タンクからの漏れを防ぐことは緊急の課題である。海側の漏えいをどうやって防ぐのかなど、規制委員会のワーキンググループで真剣に対策を練るべきだ。原発の再稼働審査より汚染水問題を絶対的に優先すべきである。